

若手教員や教育実習生の学級経営に対する視座を高めることに つながる研修の場の開発

－ 生徒理解のカンファレンスの考え方を基盤として －

長友紀子

石木雅人

(奈良教育大学附属中学校)

中山留美子

(奈良教育大学 学校教育講座 (心理学))

中嶋たや・加々見良・成田葉津美

牧原孝弥・奥原牧

(奈良教育大学附属中学校)

Development of Training Opportunities of Broaden the perspective of class management for
Young Teachers and Trainees:
Based on the idea of a conference on student understanding

Noriko NAGATOMO

Masato ISHIKI

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Rumiko NAKAYAMA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Taya NAKAJIMA, Ryo KAGAMI, Natsumi NARITA

Koya MAKIHARA, Osamu OKUHARA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

要旨：本実践は、若手教員や教育実習生の学級経営に対する視座を広げることにつながる研修の場を開発することを目的として行った。8月に公立学校の若手教員を対象とした公開研修講座、9月の実習期間中に教育実習生を対象とした研修会を実施し、それぞれに成果と課題を検討した。公開研修講座、研修会後の実践報告者及び教育実習生のふりかえりの内容から、学級経営に関する研修の場として今後さらに内容を深めていくことに意義があると考えられる。

キーワード：学級経営 class management

教員研修 teacher training

カンファレンス conference

1. はじめに

近年課題となっている学級経営の難しさは、複数の要因が関連しあって引き起こされている課題であると思われる。国立教育政策研究所が平成17年3月に示した『学級運営等の在り方についての調査研究』¹⁾では、学級がうまく機能しない状況の直接的な要因として、①子どもの集団生活や人間関係の未熟さの問題、②特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもへの対応の問題、③学級担任の指導力不足の3点を挙げている。報告書は小学校に関する調査によるものであるが、同様の状況が中学校でも見られることは、生徒と接する中で実感的に

感じられるところである。

学級経営に関する課題は、要因の複雑さから鑑みても、一面的な方法では解決されるとは考えにくく、一つの要因に丁寧に向き合っていくことが必要だろうと思われる。本実践では、中でも教員の立場から課題に向き合う視点を見出すことを目指して、若手教員と教育実習生を対象に生徒理解のカンファレンスの考え方を基盤とする研修の場を開発し、その成果と課題について検討を行った。

本文の執筆は石木が2章1節および3章1節を担当し、その他を長友が担当した。

1.1. 実践までの経緯

奈良教育大学附属中学校（以下、附属中学校と表記）では、令和元年度より、若手教員と教育実習生を対象に、学級経営の方法と視点に関する実践研究を継続して行っている。令和元年度は「教育実習を契機とした学級経営に対する教師効力感の開発とその方法の研究」をテーマに、学級ファシリテーションの視点を取り入れた学級経営の方法論について研修および検討を行った²⁾。令和2年度は、「カンファレンスによる生徒理解と教師の省察が生徒の関係性構築に及ぼす効果に関する研究」をテーマに、カンファレンスを用いた生徒理解の方法について、教育実習生を対象とした研修を中心とした実践研究を行った³⁾。

これらの研究の成果として、教育実習期間中の研修が実習生の教師効力感に効果を与えることがわかったほか、生徒理解のカンファレンスが、学級経営を俯瞰的に捉える場として有効に働く可能性があることなどが検証された。

1.2. 実践の目的

本実践の目的は、教育実習生や若手教員に対し、生徒カンファレンスの考え方を基盤とする学級経営に関する研修の場の開発を行い、次世代教員である教育実習生の研修の場として、また、奈良県をはじめとする地域の学校の教員研修に貢献する場としての附属学校園としてのあり方を考えることである。

2. 実践の概要

本実践では、2つの研修会の場を設けた。1つは、8月4日に実施した公開研修講座「学級経営」、もう1つは、9月の教育実習期間中に行った教育実習生向け「学級経営研修会」である。ここでは、2つの研修会の実践の概要を示すとともに、公開研修講座「学級経営」で実践発表を行っていただいた2名の先生に、発表に関する感想と、2学期に入ってからの実践の様子についてインタビューを行った内容について記述する。

2.1. 公開研修講座「学級経営」概要

日時 令和3年8月4日 10:00～12:30

場所 奈良教育大学附属中学校図書館

参加 33名（附属中学校教員17名、公立学校教諭3名、外部参加者13名）

公開研修会テーマ

「若い先生のための学級経営講座－多様な価値観を認め合う学級作り－」

初めに、「生徒理解のカンファレンスと学級経営」というテーマで、滋賀県立大学元教授の福井雅英先生から講演をしていただいた。

次に、「生徒理解の実践と学級経営」というテーマで参加者が3グループに分かれ、学級経営発表のラウンドテーブルを行った。奈良県公立学校の先生方の日々の実践発表と附属中学校教員の実践発表の2つの事例を切り口とし、参加者の考えや日々の実践を出し合った。

最後にラウンドテーブルを通して、福井先生から講評をいただいた。

福井先生の講演では、福井先生の実体験を交えながら、生徒の行動に表れる表面のみを捉えて生徒理解をするのではなく、その背景にあるものを見ることの大切さをお話ししていただいた。また、個人の視点や経験で行いがちな生徒指導や生徒理解をカンファレンスの観点を取り入れて行うことの必要性も話された。以前に比べ、昨今の教育現場では教員同士が多忙さの中で、日常会話を始め、生徒の話をする機会や場所も少なくなっているため、カンファレンスの視点を持って教員同士が生徒理解に取り組む必要があることをご教授いただいた。

学級経営ラウンドテーブルでは、発表者の事例について意見を出し合う中で、日頃学級経営をしている中で自身が取り組んでいること、また、悩んでいることなどを挙げていった。校種の違いによってアプローチの配慮は変わってくるが、目の前にいる子どもたちの関係をどう構築していくかについて様々な実践を出し合えた。また、教員経験がまだ少ない先生は、自身の取り組んでおられる実践が正しいのかわからなく自信が持てないなどといった不安を話されていたが、それに対し、教員経験をいくら積もうと毎年毎回これが正しいと思って自信を持てるものはない、ただ、それが今日の前にいる子どもたちにとって必要だと考えるという観点で実践を行っているという意見が出た。

表1 実践の流れ（公開研修講座）

	内容
第1次	外部講師による講演：テーマ「生徒理解のカンファレンスと学級経営」 講師：福井雅英先生（滋賀県立大学元教授）
第2次	学級経営発表ラウンドテーブル テーマ「生徒理解の実践と学級経営」 実践発表 公立学校教員3名、附属中学校教員3名 振り返り、講評

2.2. 公開研修講座実践発表者インタビュー

インタビューは令和3年11月上旬に行った。学期が半ばにさしかかり、2学期になってからの学級経営の課題が明らかになってくる時期としてインタビューを設定した。インタビュー結果は、個人情報に配慮し表現を一部変更している。

表2 インタビュー質問内容

質問1	実践発表を行なって得たものはあるか
質問2	実践発表後の学級経営で自分自身の考え方や行動に変化を感じたこと 変化がある場合、実践発表を行なったこととの関連性はあると思うか

インタビュー結果

教員 A

質問1について

- ・生徒の行動を良い面からも捉えられるという視点が自分の中にはなかった。生徒の行動がプラスに働くようにする働きかけをあんまり考えていなかったのので、そういった見方のアドバイスをしていただいたのは確かにそうだと思った。

質問2について

- ・受けとめてあげるような言葉をかけて来なかったなあと思うが、今は目の前で頑張っていることを探して褒めるということをしている。1学期に比べたら、生徒と喋る回数が増えたとか、声をかける回数が増えたと思う。実践発表で自分にはない見方を知ったことで、子どもには優しく接することができたように思う。

教員 B

質問1について

- ・普段関わる教員の人数が少ないので、たくさんの意見を聞くことができたのが自分にとって大きかった。同じ環境で見ていると出てこないような意見が多かったの、そこが自分にとって新しい発見だった。その中で、生徒と向き合う時の持続可能な支援という意見が自分でも考えてもみなかったことだった。

質問2について

- ・変化は2つあって、1つは、持続可能な支援という視点を意識するようになったところ。これまでは対生徒で情熱だけで一生懸命やっていたのが、次の学級担任に引き継ぐとか、高校に送り出すなどと考えた時に、生徒にとって大事な支援とはなんだろうと考えるようになったのが大きく変わった。もう一つは、自分の学級経営について自信がなかったし不安だったが、今回去年の実践を話したこともあって、振り返りができたので、自信がついたとは言わないが、苦労しながらやってきたな、と思ったりするんだなと思ったことが変化したところだと感じる。

2.3. 教育実習生向け「学級経営研修会」概要

日時 令和3年9月29日 16:00～17:30

場所 奈良教育大学附属中学校（配当の学級教室）

参加 81名（教育実習生64名、附属中学校教員17名）

指導助言 中山留美子先生（奈良教育大学）

初めに、研修会全体の趣旨説明を行い、「生徒理解のカンファレンス」に触れたのち、8月4日に実施した公開研修講座の福井先生の講演映像（部分）を視聴した。その後、学級担任から「生徒理解と学級経営」というテーマで講話を行った。最後に指導助言の中山留美子先生から講評をいただいた。

表3 実践の流れ（学級経営研修会）

	内容
第1次	全体説明・生徒理解のカンファレンスとは 福井雅英先生講演視聴（部分）：テーマ「生徒理解のカンファレンスと学級経営」
第2次	学級担任講話 テーマ「生徒理解と学級経営」 中山先生講評

3. 成果と課題

2つの研修を終えて、公開研修講座「学級経営」について参加者のアンケートの自由記述を中心に振り返りを行い、実践発表を行っていただいた教員のうち2名の教員に実施したインタビュー内容の検討を行った。教育実習生向け「学級経営研修会」については、実習生のアンケート結果から成果と課題の検討を行った。

3.1. 公開研修講座「学級経営」

公開研修講座は、校種や立場、経験年数を超えて、参加者全員が意見を交わし合える機会となった。その後の振り返りでは、ラウンドテーブルの中で出た意見を取り上げ、講評していただいた。

以下に、参加者の意見を記す。

- ・自分の悩みを先生方に聞いていただき、色々な角度から助言いただいた点がよかった。当該生徒を知らない先生方からの助言は、生徒に対する先入観がなく、非常に参考になった。
- ・カンファレンスで、各グループが異なる学校や異なる立場の先生方で構成されていた点と、発表の先生方がとても具体的な事例を共有してくださった点がよかった。
- ・福井先生の講演を聞かせてもらいながら、自分が若い頃の学校や取り組みを思い出した。教育現場も社会と共に変化して、それでも変わらないもの、大切にすべきものがあるということを再認識できた。
- ・福井先生の講演は非常に興味深く、ひきつけられた。ラウンドテーブルでは司会の先生が全員に話を振ってくださり、外部からの参加であるにも関わらず、学級経営において悩んでいることを話す機会を作った。

ていただいた。他の学校の先生と学級経営について話をするのは初めてだったが、生徒に対していろんなアプローチがあり、先生によって感じ方も違うのだと改めて気づいた。

成果としては、福井先生の講演や参加者の意見からもあるように、個人の視点で行いがちな生徒理解をカンファレンスの視点から行うことの重要性を参加者が再確認できたことが挙げられる。学級経営や生徒指導は個人の力だけで行うものではないが、良くも悪くも個人に責任がいきがちである。

本来、生徒はその生徒が所属する学校の全教員や家庭、地域が連携して育てるものである。まず教員同士がカンファレンスの視点から生徒理解や生徒指導を行うことが大切だと再確認できたことも成果と考える。さらに、日頃評価しづらい自身の取り組みについて客観的な意見をもらえたこと、多様な意見を聞いたことも成果の一つと考えられる。

課題としては、実践の羅列が多くなり、実践に対しての議論を深めていくことが少なかったこと、教員1年目や、学級担任の経験がない先生には実践例を挙げにくいテーマであったことは課題と考えられる。学級経営は生徒理解の一つのカテゴリーであって、すべてではないので、学級経営にくくらず、裾野を広げてテーマ設定を行うことも必要ではないかと考える。

3.2. 公開研修講座実践発表者インタビューより

教員A、教員Bともに、実践発表を行ったことで得たものがあると回答していた。内容はそれぞれ異なるが、共通しているのは、それまでの自分にはない視点を獲得できたという点である。2学期に入ってから、自身の考えや行動に変化があり、その変化には実践発表で得た視点が影響していると感じていることもわかった。ラウンドテーブルでは、できるだけ経験の異なるメンバーでグループを構成するようにしたが、良い効果があったように思う。教員Bが回答した中で、自身の学級経営を振り返ることができ、「苦勞しながらやってきたな」と肯定的に受け止める機会になったという意見は、研修会を計画した中には想定していなかった効果であったため印象に残った。

発表者自身に変化があったことは、今回の研修の成果であると言えるのではないだろうか。

3.3. 教育実習生向け「学級経営研修会」

実習期間中に行った教育実習生向け「学級経営研修会」は、当初予定していたカンファレンスの形式が、コロナ禍の影響で実習の内容が変更になった（学級に関わるができなかった）ため行えず、代替の内容で行った。学級担任からの講話と指導助言という内容で、実習生にとっては不十分な点もあったと思う。次年度以降も状況

に応じて実施することになると思われるが、改善を加えていきたい。

研修会後のアンケートの自由記述からは、「実例と先生の工夫を合わせて学び、どのような視点を持つかを学びたい」「不登校の生徒に対する働きかけについてもっとさまざまな事例が知りたい」など、具体的な事例をもとにした生徒理解のあり方について学びたいという意見があった。次年度以降の参考にしていきたいと思う。

4. おわりに

4.1. 学級経営研修と生徒理解カンファレンス

本実践は、若手教員や教育実習生の学級経営に対する視座を広げることにつながる研修の場を開発することを目的として行った。2つの研修を通して、若手教員に対して実践発表の場で語り合うことの効果が実感されたり、教育実習生の学級経営に対する疑問を具体的に知ることができたりといった成果を見出すことができた。生徒理解のカンファレンスの考え方が、生徒一人一人と向き合うことを根本としているように、学級経営に関する研修の場の開発についても、一人一人の教員が生徒と向き合う姿を共有し、学び合うことのできる場を創出していけるよう、今後も実践と研究を継続していきたいと考える。

謝辞

本実践を行うにあたり、指導助言いただいた中山留美子准教授、公開研修会でご講演いただいた福井雅英先生、実践発表者として参加して下さった各先生方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

注

- 1) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2005）『学級運営等の在り方についての調査研究』
<https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/unei.pdf>
(2021.11.20).
- 2) 長友紀子・中山留美子・有馬一彦・大谷佳子・山本浩大・辰巳喜美・成田葉津美・奥原牧（2020）「学級ファシリテーションの視点からの学級経営方法の開発・教育実習を契機とした実践の報告・」奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第6号 ,pp187-192.
- 3) 長友紀子・辰巳喜美・石木雅人・山本浩大・中山留美子・成田葉津美・奥原牧（2020）「教育実習生の生徒理解とリフレクションに関する研究・教育実習生へのカンファレンス研修からの考察・」奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第7号 ,pp225-230.